

大菩薩嶺・泉水谷小室川谷～大黒茂谷下降

2016/05/28-29

メンバー：落合（CL・記録），飯野（SL），平川

今年の5月は暑かった、そんな影響もあって夏を前に沢に足繁く通ってみたが、新緑とツツジに彩られた晩春の渓は日も長く天候も安定していて沢登りに適したシーズンでもある。

大菩薩嶺は南側から登ると眺望の良さもさることながらお手軽百名山として有名だが、平凡過ぎていまいちパツとしない印象を受けていた。しかし、沢登りに興味を持ち出してから北面に“泉水谷”という何だか魅力的な響きの渓谷があることを知り、秀渓として名高い小室川谷から嶺を目指し、さらに奥に位置する大黒茂谷を下降すれば手応えを感じることが出来るだろうと思った。

その山の懐を知るには渓からはじめることが最も効率よいと確信しているが、宇都宮渓嶺会、、渓から嶺を目指すという意味では当会の名前にもふさわしいルートである。

メンバーはお馴染みの面子だが、3人で組むのは今年の冬合宿以来2回目。

前夜は道の駅たばやまで仮眠。今回は宴会部長の齋藤さんがいないので大人しく？軽く一二杯程度飲んで三時間半で起床。山がせめぎ合って目指すピークが見えないだけに、朝飯を食べながら目の前を流れる丹波川の流りに今回の山行の想いを寄せる。

◆5/28（土）曇り時々晴れ

林道ゲート6：20 松尾沢出合8：50 小室の淵10：15 蛇抜沢出合（幕営）14：15

ゲートから林道を30分程度歩いたら小室川谷出合、下流で釣り人4名をサーセンしながら渋々追い抜く。。どうやら小室川は釣りでも有名らしい。しかし釣り人が入れるのはせいぜい下流のs字峡まで、そこから先は我々沢屋のフィールドだ。下流は魚影が濃い遊び過ぎては時間が押してしまうと思い、後ろ髪を惹かれつつ遡行に徹する。今回、平川君は沢泊デビューのビギナーであるが、アメリカ帰りでメンタル的にも一皮剥けた感がありそうなので？ゴーロ歩きだけはトップで進んでもらう。しかし、ルート・ファインディングに難があり10秒で後続に追い抜かれてしまうのでまだまだ精進が必要だろう。。

ただ、はち切れんばかりに膨れたピンク色のライペンのクロワール（首が曲がらないで苦勞していたが、中身が酒なので許す）がいぶし銀の存在感、小学生レベルのくだらないトークだけは切れ味抜群だ。。相変わらず程度の低い話で盛り上がりながら今日も溪を歩く。

小室川谷は流域面積が広いだけに下部はゴーロが長い印象を受けるが、S字峡からゴルジュちっくな雰囲気になり見栄えのする滝も多く、多摩川源流や東京近郊の沢という事を感じさせない。

名物の小室の淵は泳いで突破するつもりで来たが、曇り空で水温も低く前半ですぐ濡れになるのに躊躇してしまい結局セオリー通り巻いてしまった。。盛夏なら迷わず突っ込みどころだ。

上部の淵は木漏れ日に日が差してエメラルドグリーンに輝いてなかなか神秘的、上から淵を覗いたら尺岩魚が悠遊泳しているのが確認出来たので、ソツと毛バリを落としてみる。

真上からで合わせが難しい（という言い訳）ので悉くバラしてしまったが、気がついたら坊主確定、いつの間にか幕営地に着いてしまった。。

エサで釣ってしまったら岩魚に対してフェアではないという口実でいつも毛バリしか持って行かないが、やっぱり餌釣りのが手堅いかなと思いながら、テンカラの奥義は忘れたくない。。

幕営地は蛇抜沢出合に1張・極上の宿に泊まれるが、贅沢しなければ幕営地は思いの外前後に散見する。蛇抜沢出合は薪も非常に豊富で宴を盛大に楽しんだ。



S字峡（左）、ハイライトである4段40m滝（右）



つるしベーコン串～ビール～日本酒～梅酒～ミカン酒で悪酔いして、シチュー～米三合で撃沈

溪のなかで焚火を囲み酒を食らうのが目的になってしまうと、本日の山行はデモンストレーションに過ぎない。そして日没と共に消灯、酒の力を借りて相変わらず寝つきの速さが皆秒殺。痛飲～暴食～快眠～快便、体調の整え方も立派な山力、結局絶好調なヤツが山行を征す。。

◆5/29（日）晴れのち曇り

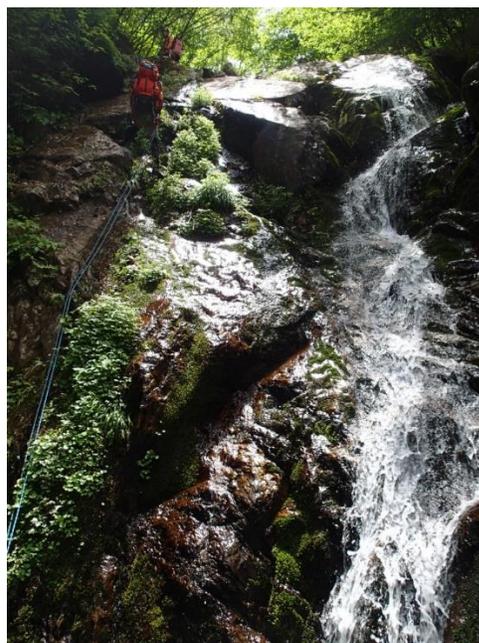
蛇抜沢出合 6：55 稜線 9：00 大菩薩嶺 9：55 大黒茂谷下降点 10：30 泉水谷出合
14：15 林道ゲート 15：30

溪を吹き降ろす風は寒く夜中に目が覚める。シュラフカバーだけで寝ていた筆者は一人ヒモジい思いをしたが、いつでも焚火が盛大に出来るおかげで何とか難を逃れることが出来た。朝の気温は体感5℃程度、寒いわけだ。。焚火の前からなかなか離れられないがシュラフを借りてみたらあまりにヌクヌクなので二人はこんな暖かい夜を過ごしてたのか！と思うと安眠は妥協してはいけないと改めて痛感。。

蛇抜沢出合から上部は特に難しい滝もなく一気に高度を上げる。稜線に出たら大菩薩嶺でお馴染みの雄大な景色が待っているが、ハイカーがたくさん歩いているので最近お決まりになってきたアウエーの洗礼（視線）を浴びる。しかし、そんな冷たい視線にも優越感を感じながら稜線散歩を満喫し、山頂を踏み大黒茂谷を下降。大黒茂谷は“山と溪谷”の著書でお馴染みの田部重治が遭難した（といっても3月末の話だが）溪としても有名だが、改めて読み直してみると大黒茂谷の印象もまた違った形に映り興味深い。



稜線から富士山の眺望、北面から稜線に飛び出てはじめて見える景色なので感動も大きい



大黒茂谷の下降

泉水谷の遡下降はアブノーマル百名山ルートとして、自分たちの技量や体力を図るいいものさしになり、プレ・シーズンに手応えを感じる一本が出来た。